



連載の解説版「もう一つの『発達のなかの煌めき』」は、こちらから見ることができます。  
最新の第16回を公開中！

私たち二人は、一九七八年に大学に入りました。翌年、養護学校義務制が施行、そして障害のある人びとの後期中等教育、保育や療育、成人期の活動や労働、放課後活動などが実現していった時代のなかで働いてきました。法の下の平穡等を掲げた正義のねがいは、必ず歴史を進めることになりました。

しかしその前進にもかかわらず、今、

たらします。それらの「つらさ」は、家族のなかから発したものではなく、「社会の問題」として家庭にのしかかっています。

手紙によれば先生は家庭訪問の折に、ひとり親で、昼間は介護の仕事、夜中はコンビニで働きながらきょうだいの進学のための備えをし、三人の子どもを育てているお母さんの日常を知りました。子どもを見る目を高めて力のある教師ならうと思っていた自分が、歯を食いしばって生きる家族の現実がみえていかつたことに気づき、胸がつぶれる思いになりました。そして、子どもやその家族が幸福に生きられる社会をねがつて教職員組合に加入し、活動を始めたのです。

## 二つの力の「せめぎあい」

私たち二人は、一九七八年に大学に入りました。翌年、養護学校義務制が施

行、そして障害のある人びとの後期中等教育、保育や療育、成人期の活動や労働、放課後活動などが実現していった時

代のなかで働いてきました。法の下の平穡等を掲げた正義のねがいは、必ず歴史を進めることになりました。

しかしその前進にもかかわらず、今、

# 発達のなかの 煌めき

## 第Ⅱ部

### 発達的共感が創り出す実践

—歴史に学び、今をみつめ、  
未来を創る

白石正久 白石恵理子

しらいし まさひさ／1957年、群馬県生まれ。小児科病院の発達相談員などを経て、現在龍谷大学名誉教授。

しらいし えりこ／1960年、福井県生まれ。大津市発達相談員などを経て、現在滋賀大学教育学部教授。

### 社会と向きあう子どもたち

この連載は、学生時代に私たちのもとで学んだ特別支援学校の先生からの手紙で始まりました（第Ⅰ部第一回）。彼女が初任で担当したりょくちやんは、「四歳の発達の節」を乗り越えようとしていたのですが、朝、友だちの言動にいらだち、暴れるようになりました。先生は、家庭にイライラの原因があるのではないかと考えました。

りょくちやんは、授業で学習した「目玉焼き」を、毎朝、お母さんと年下のきょうだいのために作つてあげていたのです。そのことを、先生にも友だちにも聞いてほしかったのでしょうか。どの子も置かれている現実のなかで、自らの発達の力によって生活と社会を理解し、家族を気遣いながら「より良くありたい」とねがつて生きています。

その子どものまなざしにとって、社会の現実は厳しいものです。家計の苦しさはおとなな溜息となり、子どもの心に響きます。きょうだいがねがい通りに生きられず苦しむ姿を、自分のことのように感じ取ります。親の労働や健康状態の変化は、子どもに言いようのない不安をも

ります。すべての人びと、とりわけ社会的に弱い立場の人びとの幸福追求と基本的人権の保障において、歴史を押しとどめようとする力が、政治によつて加えつけられています。障害をもつて生きることを自己責任とし、応益負担を求める「障害者自立支援法」がもち出されたとき、私たちはその反動の力の正体を、まざまざと目にしました。しかしそういった政治があるならば、それを押し返そうとする力も逞しくなることを知りました。そこには、二つの力の「せめぎあい」がありました。

この前途への不安感は、まず生活の苦度の生活」（憲法第二五条）を保障されない多くの人びとの現実を反映していくま

す。リョウちゃんの家族のように、障害のある人びとその家族の多くが、「歯を食いしばつて生きる」生活のなかにあります。この現実へはならないでしょう。「はたらけどはたらけど猶わが生活」にならざりぢつと手を見る」（一握の砂）と石川啄木が詠つたように、この資本主義の社会で働く人びとは、労働

の対価とされる賃金以上に働かされ、

企業はその分を儲け（剩余価値）として蓄積していきます。さらに八〇年代から始まつた新自由主義は、福祉・医療・教育などの公共部門までを儲けの対象とし、その民営化、雇用法制を含む規制緩和、市場原理を徹底しようとする営利至上主義です。とくに日本では、儲け（搾取）を強めるために「非正規雇用」が拡大され、多くの若い世代は家庭をもつこともままならない低賃金、低所得状態にあります。

そして本来、富を産み出す存在ではない福祉労働者も、企業・施設が受け取る報酬や利用料を最大化し、人員・設備、賃金を最小化することによって利潤を拡大するしくみのなかに取り込まれました。そのなかで目にするのは、子どもや障害のある人びとの生命と尊厳が守られない人的配置の乏しさです。

さらに福祉の現場では、誰でも同一の「サービス」を提供できるように、実践のマニュアル化とそれへの準拠が当然のように課せられています。学校教育の現場でも、まず「学習指導要領」への適合が問われ、そうして設定させられた教育目標の達成状況を数値化し、「P D C Aサイクル」によって繰り返し検証するこ